

● 中 部

水 野 みか子

三年に一度の国際芸術展「あいちトリエンナーレ」が8～10月に「情の時代」をテーマとして津田大介芸術監督のもとで繰り広げられた。今回特に刺激的だった演劇プログラムやパフォーマンスは、円頓寺商店街をはじめオルタナティブな場でも催され、音楽ではサカナクションや純烈が大規模に打ち出された。開幕三日目にして閉室となった「不自由展」が出演アーティストたちのボイコットや作品の非開示へと連鎖し異様な論議が飛び交うなか、舞台芸術や音楽公演は話題の影に隠れてしまったかのような状況ではあったが、公募企画で取り上げられたニフエール、MiA, The Other Side, Seanix, NEOFLUXUS, 愛知ロシア音楽研究会、「渦の中の女たち」などは、国際芸術祭の大きな枠組みの中でこそ可能な充実したコンサートを行った。

トリエンナーレ以外の現代音楽では、「トルコ現代音楽の系譜」を優れた演奏で聴かせた音楽クラコ座(2/9)、カーゲルの《アクスティカ》と足立智美の《アクスティカですか》を並べたパフォーマンス(3/16)、檜垣智也のアクスモニウム演奏と七里圭の演出・映像による「サロメの娘」(3/9,10)、一柳慧と三輪眞弘をフィーチャーした「ぎふ未来音楽展」(9/14)などが目立った。「ARTOC」,「アッセンブリッジ・ナゴヤ」,「久屋ぐるっとアート」など地域活性化音楽事業も今年は特に注目された。

秋はベルリン・フィル、ウィーン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管が2週間の間に立て続けに来名し頗る豪華だった。

名古屋フィルと音楽監督小泉和裕は、3月定期でのR.シュトラウス《ツァラトゥストラはかく語りき》、9月定期でのワーグナーの《ジークフリート牧歌》とブルックナーの第7番、11月定期でのベルリオーズ《幻想交響曲》などで密度の濃い演奏を実現し、楽団員の入れ替わりが比較的多かったこの1年のなかでも安定した響きを熟成させた。アクセルロッド指揮の1月定期では、酒井健治の新作ピアノ協奏曲は演奏されず、代わりに酒井のヴァイオリン協奏曲「G線上で」(2015)が成田達輝の独奏で演奏された。2月定期では藤倉大の《ソラリス》組曲をヴィットの指揮で初演、12月定期ではカンブルランの指揮、藤木大地のカウンターテナー独唱で酒井の《ヴィジョン》を初演。7月定期ではブラヴィンス指揮で藤倉大の《グローリアス・クラウドズ》を演奏したほか、チャクムル独奏によるメンデルスゾーン協奏曲第2番も魅力的だった。ホリガー指揮の10月定期では、ソリストが急遽来日しないこととなり名作《デンマーリヒト》がキャンセルされて、代わりに細川俊夫作曲、イングリッシュホルン(マリー=リゼ・シュバハ)とオーボエのための《結び》が演奏された。定期以外に、小泉、外山雄三、川瀬賢太郎らが主導するロシアンファスティヴァル、鈴木秀美が主導するしらかわシリーズ(2019年リニューアル・オープン)、酒井絳と酒井健治(新作《デチューン》を含む)の作品をネリベル生誕100周年と組み合わせたウィンドオーケストラなどの人気も高かった。

セントラル愛知交響楽団は5,6,7月定期で中野振一郎指揮・チェンバロでバッハとヘンデルを集中的に取り上げた。2019年4月から常任指揮となった角田鋼亮は、9月定期で水野みか子《ミルフォード・ポンド》初演、シェーンベルクの室内交響曲第一番管弦楽版日本初演、ペーターヴェン《英雄》という濃厚なプログラムを打ち出し、12月からはハイドンを核とするシリーズを開始。中部フィルハーモニー交響楽団は定演で集中的にドヴォルザークを取り上げた。愛知室内オーケストラはフィンランド友好シリーズを展開、フィンランド公演も行った。

名古屋二期会がリードした《ホフマン物語》(10/5,6)、神奈川や札幌と愛知の共同制作《カルメン》(11/2,3)、ニッセイ名作シリーズの《ヘンゼルとグレーテル》(10/18)、豊田市コンサートホールでの狂言風《フィガロの結婚》、エウロ・リリカによる《エフネギー・オネネギン》などが上演され、トリエンナーレではオペラが外されたものの、国内のオペラ制作も盛況だった。

パイプオルガンでは、2018年末に楽器オーバーホールが完了した愛知県立芸術劇場で初代専属オルガニストとして都築由理恵が就任して活躍。加えて、椎名雄一郎によるレクチャーコンサート、トーマス・マイヤー=フィービヒの作品個展、吉田文の「名古屋オルガンの秋」、近藤岳とカウンターテナーの中嶋俊晴による「クリスマスはオルガンだ!」など興味深い企画が続いた。豊田市コンサートホールでは専属オルガニストの徳岡めぐみが能管の竹市学、シテの梅若紀彰とコラボ企画を実現した。

東海バロックプロジェクト第5回公演はチェーザレ、コレリ、ペルゴレージなどイタリアバロックの変遷を辿った。ザ・ストリングス名古屋は第24回定期でヴィラ=ロボス、レスピーギ、バルトークを好演。2018年の名古屋音楽ペンクラブ賞受賞者山本敦子がチェロの藤村俊介、メゾソプラノの相可佐代子と舞台に立った「山本敦子とソリストたち」やピアノの鈴木真貴子、宮田俊雄、ソプラノの金原聡子の三人がステージを分け持つ「音環Ⅷ」、ピアノの松本総一郎、ヴァイオリンの白石禮子、チェロの花崎薫による「ラヴェルの夕べ」トリオ・ミニストレル、室内楽集団アンディアーモ、寺田弦楽四重奏団演奏会、ヴァイオリンの山根一仁とピアノの北村朋幹のデュオ、トロンボーンの中宏史とマリンバの田中紫織のデュオなどは特に優れた室内楽コンサートだった。

ピアノリサイタルでは、山内敦子(2/11)、高山美智子(2/13)、長野量雄(3/28)、福永真弓(4/5)、石川馨栄子(4/6)、金澤みなつ(4/12)、菅原奈都(6/22)、萩原麻未(7/19)、神野すなほ(7/23)、廣瀬恵子(9/16)、伊藤香紀(9/28)、戸谷誠子(10/2)、高須博(10/10)、廣澤純子(10/20)、大久保理紗(11/13)、菅原美枝子(11/19)、松下寛子(11/22)、声楽では、近藤璃佳子(5/28)、松下伸也(6/8)、池田京子(10/3)、近野賢一(10/11)、萩野砂和子(10/26)、新実真琴(10/31)、芳村喜久子(11/9)、伊藤晶子(11/16)、妹尾樹(11/16)、加藤晋(12/7)、盛かおる(12/22)、弦楽器では野村友紀(vcl.4/4)、玉井菜採(vn.7/6)、岩田優里愛(vn.12/13)、管打楽器リサイタルでは、村田四郎(fl.5/29)、ゲオルギ・ジャシコフ(fg.6/22,23)、渡辺志穂(sax.6/23)、深堀賢太郎(Mba.7/9)堀江裕介(sax.9/14)、林裕人(Tuba.10/18)、水野沙織(cl.11/8)、菅生知巳(打楽器.10/24)、窪田健志(打楽器.11/2)、河合佑里奈(sax.12/4)らが注目された。